

四季草

殊中

五

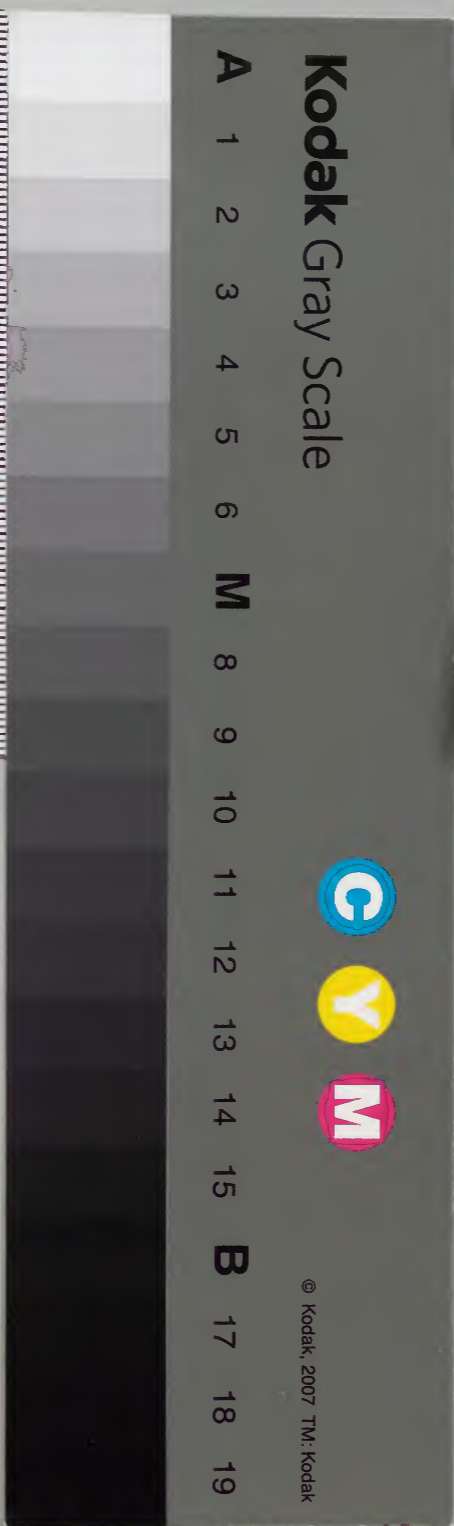
番外書冊

			二〇七八二	和書門
七	八	〇	六	類
冊	架	函	號	

庫	文	閣	内	
一五三		二〇七八二		和書
架	函	冊	號	

漫筆類

内閣文庫		
番號	和	20782
冊數	7 ( 5 )	
函號	153	293





秋草

卷の中



浅草文库

目錄

官位之類

公家

武家

宰相

家系侍従

集人查教員

正并少輔

衣服之類

納豆烏帽子

折念布

小笠

長小笠

正位女友礼服

赤襖

赤襖細綿

正密

袴衣

布衣

大紋

風打念布



麻上下

上下

長袴

半袴

裏袴上下

長袴

袴上下

十徳

袴

小袖

歴汁目

歴汁目

鼠色衣服

帷子

鼠色衣服

袴上下子持袴

立袋

立袋

家紋

肘腋

袷

白衣

股引

袴

下帯

女湯具

女衣服

女袴

刀 釵

眼瓦

少刀

刀

大小

鞘卷太刀

後 雄介湯

加うい

遺

以上



官位之部

一 云家といふは林有豪のりり人たる後才了云漢同之旨  
 用配流者畧中以下云家元有為の権依者道は由り  
 一 尉季雅右内侍に伊達ホ正地を師而歸布配る  
 又云亦伊周私修を元法佛佛信者非公衆者不  
 修く法也之く東隱老十一建久二年三月音於躬奏  
 状云畧又報於躬有各々を付る自公衆何は  
 也妙法畧中畧はあ傷今以言は法師を名忠市身營  
 公衆唯是少より取といふは林有豪致くして子向之  
 云ぬは林有豪（江）より云く如殿上人の事致る事也

*[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]*











く名のきぬのあつれにうきまをねと細ふあつてあ  
あひてそのみちよもれまをれまをれまをれまをれまを  
のりともをれまをれまをれまをれまをれまをれまを  
ろくわをれまをれまをれまをれまをれまをれまをれまを  
きくわをれまをれまをれまをれまをれまをれまをれまを  
いひておをれまをれまをれまをれまをれまをれまをれまを  
まをれまをれまをれまをれまをれまをれまをれまをれまを  
しうまをれまをれまをれまをれまをれまをれまをれまを  
のまをれまをれまをれまをれまをれまをれまをれまを  
とけまをれまをれまをれまをれまをれまをれまをれまを

上はつ角の  
かまをれまをれまをれまをれまをれまをれまをれまを

又室町殿時代よりおをれまをれまをれまをれまをれまを  
かまをれまをれまをれまをれまをれまをれまをれまを  
祝世折といふは東山殿の比の橋本祝世の折極之  
とておをれまをれまをれまをれまをれまをれまをれまを  
年始の御礼は堂城のゆいおをれまをれまをれまをれまを  
祝世は為る能くおをれまをれまをれまをれまをれまをれまを  
用るゆいおをれまをれまをれまをれまをれまをれまをれまを  
備へ祝世折世に廣くおをれまをれまをれまをれまをれまを  
一折をれまをれまをれまをれまをれまをれまをれまをれまを  
古の細き玉き但世殿用ては油物の徳のゆい























少々指衣の付るるにせしむるに後著れず所なく  
平指ハ倍ク云 心口殿上人ハ云々著る所ハ付指とせし  
 めきの袴とつひの袴の裾ハ坊々ぬの裾ハの  
 如く但法衣とせしむるに西の裾ハ是れとせしむる  
 とつひの裾ハ法衣とせしむるに西の裾ハ是れとせしむる  
 西平ノ人毛をよめんとつひの世ハあまのくくあま  
 了成月ぬけり此美事お定基ハ此新井能持  
 君貞ノ言ハひし書れんて  
 一 布衣此り 古ハ布といつひ名目物ハ布衣始  
布のいふ といふ今世に江戸めてはわと云前記す如く

古ハ布衣といひしハ袴衣のよりの袴抄袴衣此条ハ  
 布衣と袴衣の字成を角しと記し今西之系此  
 装束抄布衣の条ハ袴衣ハ色不定と記し今  
 装束拾要抄ハ布衣袴衣とも云と云今今西之系ハ  
 今ハハ布衣と袴衣ハ日物之院之と世ハ織紋ハ  
 と袴衣といひしが法衣布衣といふ古今違ふ  
 一 大紋の事ハ布衣此条之 此条此の 西之系装束抄ハ  
 布衣此の事記す更之條ハ大紋といふ人ハ  
 紋ハ今西之系ハ法ハ寺伊之と云今西之系ハ  
鹿 鹿苑系法ハ始と云今西之系ハ武家此條也



これより一ツの得之布衣紀は福の布ひたす  
小糸草此紀之布衣紀は侍入院守永仁三  
年より記しより之は美濃守代嗣より一ツ自治元年  
より七十二年より之又信濃の月事記より云ふは此紀  
仲時 東武切のよりさるる中列尚のよりハ道北は  
より信濃より折之布衣に布の初されとつてあり  
きそけとやれ衣紀人の世人もに記れよとハ  
より一ツ之はさき記より二ツ五月に記とつて  
美濃より一ツ希ありし事代記より一ツ光記 西三条  
定隆云  
同書記より麻衣院殿伊代記と此人今迄布衣

侯より其衣紀より一ツ向非中義の陣衣大  
は家記より縮のより美濃の時に記と此人より  
此記の人の記より一ツ親より一ツ入  
替書より一ツ云ふ事あり 布衣記とあり云ふ事あり  
之角中より此より一ツけ時布衣記始より一ツ阿久  
大波の事後より似たりを替り月ハ大波ハ胸衣  
角より一ツもに九代迄之事後ハ角は菊より九に  
草此紀之大波の袴ハ腰細白布之腰板の角  
九一腰細より白糸より上刺ありし事紀の腰細  
ハ同より色此布之腰板より角より腰細より一ツ也  
大波も事紀より一ツ故肯ふ一ツ袖此中のみあり











天極の延徳二年小島原と記すひしく松水も世  
永祿よりハ七十迄の事又松水も亦より肩衣  
可し記之又一記は近所龍山云希云云善徳の  
時其の事云はれり号東泉院龍山云善徳の他  
に於て肩衣も亦後より記すひしく亦後也  
新山云ハ其長十七年ハ薨しうひて松水より其  
の人より新山云の始よりハ何れも其の事云  
古代の肩衣より記すか神女羽織と云也の事  
之先内府記ハ亦肩衣有表云亦後也  
亦亦此の時より云はれし後云神女羽織も亦後也

亦後也の事云はれし後云神女羽織も亦後也  
多し一記は古の肩衣より記すか神女羽織も亦後也  
今世の肩衣ハ此の記云はれし後云神女羽織も亦後也

之先内府記ハ亦肩衣有表云亦後也  
之正七より薨す今亦後也

一 上下と云ふハ新上下なるは古ハ何の装  
束なく上下をさしたる物ハ上下をさす十洲抄ハ  
青西八条の合人より肩衣有表の目一糸東  
洞院の記云はれし後云神女羽織も亦後也  
人多く記すはれし後云神女羽織も亦後也  
かの書より云ふと云はれし後云神女羽織も亦後也



















一 少神とつゝ六部て袖より紙丸く縫つて五つお稽え  
 一 腰入るては糸物かきつゝ一と袖の巾あきまを  
 一 少神とつゝおまの糸物をもに對してつゝおまの糸と  
 つゝお祐とつゝおまの糸物をもに對してつゝおまの糸と  
 是れおまの糸物のかき種之糸はそれよりおまの糸と  
 一 神少神の如くおまの糸は比神或總合おまの糸と  
 一 順の裾の糸を以ておまの神太。口角よりおまの神  
 一 おまの糸を給へておまの神と對して少神とつゝ  
 一 蒙束或糸をたす川白お神或よりおまの糸のよま

一 蒙束と糸物とつゝおまの糸は比神或總合おまの糸と  
 一 順の裾の糸を以ておまの神太。口角よりおまの神  
 一 おまの糸を給へておまの神と對して少神とつゝ  
 一 蒙束或糸をたす川白お神或よりおまの糸のよま

一 一 曆中目ののりよりおまの糸は比神或總合おまの糸と  
 一 蒙束と糸物とつゝおまの糸は比神或總合おまの糸と  
 一 順の裾の糸を以ておまの神太。口角よりおまの神  
 一 おまの糸を給へておまの神と對して少神とつゝ  
 一 蒙束或糸をたす川白お神或よりおまの糸のよま







のきちる物そりりて女をて年いけは  
をさうしと苗御家にて信以とあらみ後  
下歴目と此割法取るれらりてと世男  
の袷波おのの成申と是御割法あらるハ膝  
所とのの成る人代と此控也  
一 之他れよめとつる物腰も袖下しも筋多とつ  
色とせの物えじうと此袷の物ハ物よと筋取  
入つる物え好も腰と袖下しに筋取成之袖と腰  
中し筋取ハ古風取つる物え後らにを世  
腰は筋取成後取つとつひあらと増れよと

物とつとそりよ老あ一 用は立人衣のの成  
用あらハ一 物とつ古後取つとつ名目也  
又増れよと此の用も年と古衣取れ也  
よハ人さうものこ物とつ今世昔くあらるもの  
ハ古衣あらと此腰は筋取成と人の老人取ハ  
人衣にを取とすれハ衣取多と世のあらるに  
随つて一 是ののあら人今世あらるあらハ  
あまて古衣は針とつら申とれもちんあ  
なると世は取つらと一 物とつにそり衣ハ  
よかりなり



















慶長の比より一色人商賣の爲より和服  
 かの和毛人の上まき衣後の袖となく  
 物なくそれを彼西人の何よカッハと  
 言ひて定けしなり  
 一 裁紋のより 紋とつゝハ衣履は  
 今相の二字ハ  
 一 裁紋のより 紋とつゝハ衣履は  
 今相の二字ハ

一 裁紋のより 紋とつゝハ衣履は  
 今相の二字ハ  
 一 裁紋のより 紋とつゝハ衣履は  
 今相の二字ハ



無幕なるに衣被は後よりよりなるに字を絶は  
 曰公亦極御服と申ハ織物色以被高き後又何なる  
 じき以地と色をよほく御被無きを以て其を是ハ  
 东山義政の時代のもの之御被不定と何處之れハ  
 之以ハ衣被ハ家紋より賜ハ何紋より其年所  
 後世必家紋の印ハ分るやよむし  
 一 何服と云ふ者同上古より何しる之種合よそく  
 凡親王の子十二以上皆給何被料去絶二丈綿  
 二約布口端湊十口秋絶二丈綿二尺布口端  
 湊に擬しく續り何被料十二云云至武天皇天皇  
 何服云々

八年冬十月甲戌施度僧乃階波所の僧若提等  
 何服云々  
 一 紙衣もじうじう何し物之源平聖德太子記卷四  
 云法皇太子 恙くしてはこれなり一たりを尾の紙  
 衣のよよ垂深の衣被をよりり之を今地衣系  
 蓮花法師の寄り何し何の澄り何し何  
 衣より何し何の針ハ矢ハ通る何し何し  
 一 白衣と云ふハ礼服衣を云ふて袴汗忌り何し之  
 今世袴衣と云ふハ何し何し何し何し何し何し  
 聖德太子記卷十二臣連 帝人何し何し何し何し何し何し



大由申よ白糸とて長押よ尻をくく公家流此年  
 暖ハ下は白少袖成云く上ハ赤糸と云く  
 下よハさうめきの袴成云く馬帽子成云く  
 白糸とハ赤糸とハぬぐひさうめきもぬぐひ赤糸  
 ぬきくりの白少袖阿ハ白と白糸とて之武成也  
 いろくハ紫束の中よハ白少袖成云く  
今世武成を  
ハ下位第の人  
白少袖云  
うり列柱之 赤糸とハぬぐひ袴とぬぐひ赤糸束腰とて  
 云くう成白糸とて之今世の風俗とてハく有糸  
 忌をひくして袴成云くハ白糸  
 一 股川のぬぐひいろくハさうめきとて又ハはきと云

東暦才二 夢取元  
六月七日の条 以段解當辰長 八人半 石巻  
 甲之節令村三股解ハさうめき 解のまはく  
ぬぐひ成云 今迄始  
 透巻九よ つひまきいり節  
仙伝長巻の条 いろく 長巻を川に流さ  
 とつて者いろく 中畧 年六十八いり男のちり  
 をたりのぬきをたててきくく 字あ紀  
すま  
 公家様此少者 ちりまき 柳才ハ十月内地の  
 水邊(柳成方) ちりまき  
ハさうめきとて  
ちりまきとてハ  
まきとてハ  
 一 柳才又ちりまき 中畧 柳才ハ十月内地の  
 波は後とて ちりまき 柳才ハ十月内地の











たけりては宮下殿時成は後徳物とひつるよ  
うへへじうへはものやく色く此後を深あひ  
かへして画ときてこそなるに徳物へなるが  
層中四紀 伊勢貞字の紀 よも水あつくはゆりあやみか日中あひ  
後ふ時のくみんまひ水糸山水糸極世ふのんあひ  
水とつてこそさつれは水てろのつせその外 同名達  
しそは水とつてやしやあつとよ二つとどて入を  
かすのまゆへ水あけゆきあひあつてはあつてはあ  
れようへあつてはあつてはあつてはあつてはあ  
るあつてはあつてはあつてはあつてはあつてはあ

水とつてはあつてはあつてはあつてはあつてはあ  
大上齋の志のひりのあつてはあつてはあつてはあ  
てあつてはあつてはあつてはあつてはあつてはあ  
一 如此修きさるゆりあつてはあつてはあつてはあ  
腹うれはあつてはあつてはあつてはあつてはあ  
或家へはあつてはあつてはあつてはあつてはあ  
宇治拾遺巻九よ紙子回教聖といふ所はあつてはあ  
位位りりあつてはあつてはあつてはあつてはあ  
このあつてはあつてはあつてはあつてはあつてはあ  
一 つあつてはあつてはあつてはあつてはあつてはあ















不知しとて 其れ何

一 大少成さひのりや世ナカと服括とさひを中と  
り之室所敷時代の時地よきえ之を以て腰の  
中成さしてナカ大カハ依の考に於て之大少成  
るの依者秀名の出観由よとて始りしもの之  
或書 類考あり一井之  
氏不危なり 肥前守新造与太周子清系  
御目よそり秀名をへ伺云波しよりし時秀名を  
新造書に在作ハ之を對面一我あり種々法  
乃を成えせて中へ建新造守成に連年念入り  
ふひしに少しと新造守よ此を成る可服を

わき新造守よとてせえとくうひしと新造守  
御う大少成始りしよりき大カとつる  
小秀名のけよありしと

一 新巻大カのりや世物とまねくつるナカと新巻  
左カとつる唱落之古ハ系巻の左カとつひし  
古(新巻)とつひしハ腰ののりハ腰上系巻之  
名ハ新巻とつひしハ名よりの物成系と巻と新  
しとつる巻とつるナカ(系巻)大カとそ之古之御大カ  
系と何ハはりハ新巻大カとつひハ非也

一 浩大カとつる或家と家も帯とら神段 一名平  
新の合カ







くしあまといふくさくさといふとらふ事南成か  
ふふといふは例へてと井音お遠くさるる  
くんといふ

一 陰のり 濃金お家とく 幸部お家の付代とる  
を武士おりよ陰をおさるるや 武新記よ  
あやしく 下の附長 具足おひくさくといえさ  
是ハ系部お家此附のり 東濃は将軍お家乃  
は烈成記せし 如多しれを徳のり 是ハ系部  
二〇 正月三井古 合戦の日矢授るより 徳長口  
成出して 教に実るるより 太平記よとて古

代の武士ハ乃矢成ひて 働きしや 武士成り  
元といひし 信長秀吉の比よとて 乃矢とて  
働くよりかより 濃成ひて 働きし 濃成  
ひて 武切の實とと 乃矢のり 後初の比  
し 乃矢のり 濃成ひて 濃成ひて 乃矢のり  
かり古の侍ハ乃矢といひ 今此侍ハ 濃成ひて 乃矢  
とくさく 是 古今比 濃成

輝草巻の中 終



Handwritten text in a cursive script, likely a historical document or letter. The text is written vertically on the right page of an open book. The characters are dense and difficult to decipher due to the cursive style and fading. The text appears to be organized into several lines, possibly representing a list or a series of entries. The ink is dark, and the paper shows signs of age and wear.



